

司会 つぎに、この実験番組を見た人たちからの反応の結果を、坂本さんから、報告していただきます。

### 厳しい視聴者の反応

坂本（東京工業大学） われわれに与えられましたタイトルは＜視聴者の反応＞ということですが、これは考えてみますと、できない話です。昭和60年になって、放送大学の学生が入り、授業を受けて、試験を受けて、学力を評価されて卒業するぐらいになって始めて、どういう番組がよかったか、視聴者の反応はどうだったというのが本筋でございます。けさお話がありましたように、実際に動き出してから学生の反応をとりつつ、番組やその他の教育システムをよくしていく、これが本筋です。そういつて放っておいたらいいか。そうはいきません。ですから、とれるだけの資料はとって、想定される学生たちの反応はどういうふうになるだろうという仮説を立てる、その資料になるようなものはえられないか、ということから、幾つかの試みをしてみました。

この宗教の番組の実際に送られた年にスクーリングに出てきたお客さんに、これからお話申し上げる分析と同じ分析をしていただいたのです。

どういう分析かといいますと、コンピューターにつながったスイッチを持たせまして、番組を見ながらおもしろいところは押してください、わかるところは押してくださいということをお客さんにお願いしたのです。ところが、ボタンを押すことができないのです。

どうしてかと考えますと大部分大学で勉強したことがない方々ですから、大学の先生に対してこういうボタンを押すのは恐れ多いという気持ちで押すことができないのか、あるいは、分析的に者を見るトレーニングをしたことかないのか、恐らく両方ですけれども、後者の感じが強いと私は思いましたので、今回は、いままでにも、学校教育や大学の番組について、ボタンを押し慣れた人たちを集めました。20人です。その中には、まだ慣れてない人も1、2入っています。

このグループにきょうの順番で番組を6本見せました。見せながら、

わかる

わからない

おもしろい

おもしろくない

こういう4つのカテゴリでボタンをおさせました。10人について、「わかる」を右手、「わからない」を左手、片方ずつ持たせます。あと10人「おもしろい」「おもしろくない」を持たせまして、番組を見ながらどっちかを押させていく。中間もありますから、3つの条件でボタンが押されるということになるわけです。

この4つを選びましたのは、「わかる」系統と「おもしろい」系統は、視聴者の反応を、知・情・意の側面にわけますと、常識的な反応が「おもしろい」で、意思的な反応が「やってみたい」です。しかし、宗教の番組で「やってみたい」というのはちょっとそぐわないというような気持ちと、余りにも多くボタンを押しますと、人数の点とか、これから見ていただくグラフが同時に出ますので、画面が煩雑になるので、この2系統4項目にしぼりました。

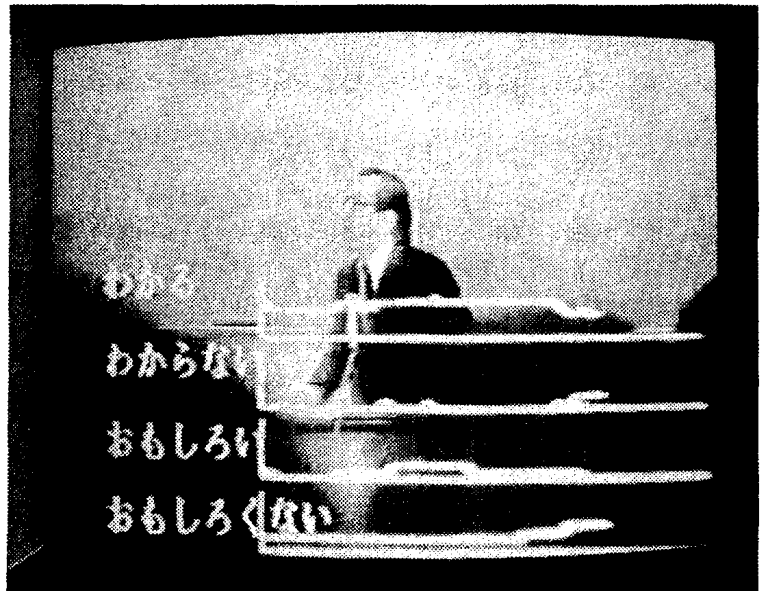
最初2番組、これは成績の順に入れかえてございますが、しばらく見ていただきまして後、早いサーチでどういうふうにグラフが動くかを見ていただきます。1番上に出てまいりますのが「わかる」、2番目が「わからない」、ついで「おもしろい」、「おもしろくない」ですから、各形式と反応のグラフの動きをごらんになっていただければと存じます。

## ＜視聴者の反応＞映写

教室1カメラです。4つ  
グラフが動いているところ  
をごらんください。

わかっているというグラ  
フはある程度プラスにで  
ております。

おもしろみはこのよう  
でございます。



つぎは教室3カメラです。  
これはわかっているは高  
いようでございます。

ちょっとおもしろくなっ  
ているところが多いよう  
でございます。



つぎは、スタジオでとり  
ました番組です。

少し、「わからない」反  
応が出たようです。

「おもしろくない」とい  
うのがかなりふえており  
ます。



4 番目は、現地中継です。

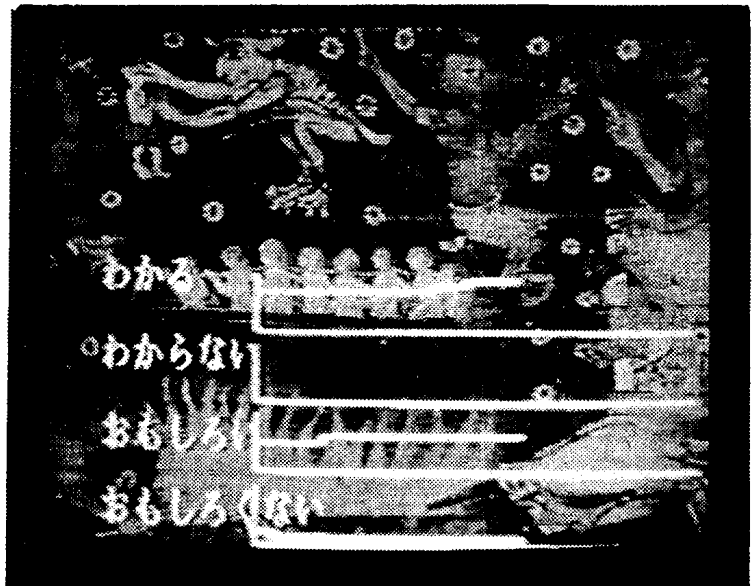
具体的になりますと、非常に「わかる」反応が出てまいります。

「おもしろい」がいま一息という感じです。



5 番目は、ドキュメントで柳川先生がナレーションを入れてくださったものです。

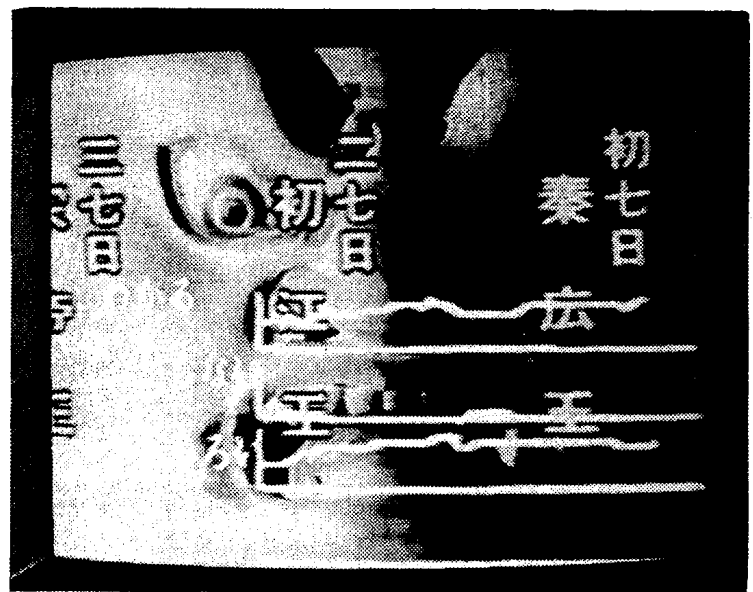
4 番目と似たような反応です。



今度は、ドキュメントの久米明さんのナレーションのものです。

おもしろさを見ていただきますと、大分、前のとは違っております。

「わかる」のレベルも、先ほどよりはわりに高いことが示されています。



実は1時間半から2時間分全部こういうボタンが押してあるのですが、時間もきょうは、ありませんので、各番組3分ずつ選びました。もしご関心がおありの方は、もとのものがございますので、お申し出をいただければ、ごらんいただけるように致します。

これをまとめてみます。

まず、

わかる

わからない

おもしろい

おもしろくない。

の各項目を一覧表にしてあります。(第1表)

第1表 番組 天国と地獄

	順番	わかる (%)	わからない (%)	おもしろい (%)	おもしろくない (%)	時間 (s)
スタジオ	1	57.0	8.4	40.6	16.1	1120
教室1カメ	2	48.3	5.6	4.5	31.9	380
教室3カメ	3	44.7	14.4	10.8	18.2	989
現場中継	4	40.9	5.3	47.7	7.0	1040
ドキュメント 教師	5	51.9	2.5	45.7	3.5	825
ドキュメント アナ	6	58.5	4.1	54.4	5.3	946

各グループ 10名

Rit...iグループのt秒における反応の平均(%)

(例) 10人中5こがONなら50%

値は, 
$$\frac{T}{\sum_{t=1}^T \text{Rit}/T} (\%)$$

総体的に見まして一番評判がよさそうなところは、このグラフをごらんいただきますと、「わかる」というのがスタジオ57%、ドキュメント・アナが58%、現場中継はちょっと低くなっておりますが、教室1カメラとドキュメント・アナを比べてみますと、「わかる」というところで著しい差があります。グラフの総集計値とお考えいただいたらよろしいかと思いますが、特に「おもしろくない」は

下の形式の方がよくて、上の形式の方が悪い。とくにドキュメント・アナは「おもしろくない」の反応が低いのです。「おもしろくない」反応は、これだけ差が出てくるというふうでございます。

今度はスタジオ形式に着目致しますと、「わかる」方は非常に高いのですが、「おもしろい」のところがちょっと落ちてきてまいります。現場中継の方は「わかる」方がちょっとわかりにくくなってきている。ここだけがどうも特別な反応をしているようですが、あとは真ん中に大現場中継が入る。スタジオも真ん中に入ってまいります。こんな感じの相対評価になります。

もう1つは、教室1カメラと3カメラでは「わかる」方はほとんど差はありませんが、3カメラになりますと「おもしろくない」がぐっと減ってきて、スタジオに近づいている。

それから、ドキュメント・アナウンサーと講師の方の差が、内容の違いによってはかなり出てくる。

これが、こちらのボタンを押したときの反応率に基づいたデータでございます。データを簡単にまとめてみます。

ドキュメント・アナがよろしいようです。

それから、教室の1カメラがよくない。よい、よくないという表現は大変語弊がありまして、問題なんですけれども、一応グラフから見ましてこんないい方をさせていただきます。

スタジオは、「わかる」に比べて「おもしろい」の方が落ちる。しかし、まずまずの評価をされている。

5番目として、3カメラによる教室の講義はわかるのですが、おもしろくないとう反応が出ます。

ドキュメントによるアナと講師、教室における1カメラと3カメラに差が出るということが、ボタン押しの結果から明らかになっています。

第2表

	ヨサ	ワカリヤスサ	オモシロサ	イヨク	ハクリョク	ジュンイ
スタジオ	5.85 (1.13)	6.20 (3.86)	5.45 (1.85)	4.90 (4.29)	4.55 (2.25)	3.65 (0.83)
キョウシツ 1ダイ	4.15 (2.43)	4.95 (3.35)	3.95 (2.75)	3.50 (2.95)	3.00 (1.80)	5.65 (0.63)
キョウシツ キリカエ	4.95 (2.95)	4.95 (2.45)	4.70 (2.81)	3.70 (3.71)	3.40 (2.24)	4.65 (1.03)
ゲンバ チュウケイ	6.30 (3.71)	5.90 (4.99)	6.10 (3.99)	5.55 (3.85)	5.95 (4.05)	2.75 (1.79)
ドキュメント コウシ	7.10 (2.69)	6.60 (2.14)	6.70 (2.61)	5.70 (4.01)	6.40 (2.64)	2.35 (1.73)
ドキュメント アナ	8.05 (1.25)	7.65 (1.33)	7.85 (1.53)	6.45 (4.45)	7.05 (3.15)	1.95 (1.25)

第2表は、同じボタンを押してくれました人に、先ほど皆様方にお答えいただきました評価表を渡しまして、これで点数をつけてもらいました。その結果でございます。要約いたしますと、10点満点でこのような点をとっております。平均すると5.7でドキュメント・アナウンサーが一番よくて、教室1カメラが一番悪い。

さきほどの内田さんの分け方で申しますと、映像タイプの方がどうも上にきまして、伝達タイプの方が下にくるという資料が出てまいりました。いろいろな問題点含んでおりますので、そこを留保しながらごらんいただきたいと存じます。

以下のカテゴリー、

よさ

わかりやすさ

おもしろさ

学習意欲

迫力

という、いずれの項目においても、それぞれ大変共通しておりまして、カテゴリー一別の違いはほとんどありません。若干違う点がありますが、後はほとんど変わっていません。細かくごらんいただく方のために、分散が括弧の中にはいっておりますので、順位の分散を見ていただくと、0.8とか1.2というふうに大変小さい、

即ち順位のばらつきは余りない。意欲とか迫力は分散がある程度高いので、反応にかなり個人差があるというようなことも読み取れるかと思います。しかし、ドキュメント・アナと教室1カメラ、ドキュメント・アナは全体的に分散が少ないので、いまの被験者たちにとってドキュメント・アナ形式が相当評判がよさそうな気がするのでございます。

このアンケートを一言でまとめてみますとわかりやすさで現場中継が少し落ちておりますが、その点を除きますと、すべて

ドキュメント・アナ

ドキュメント・講師

現場中継

スタジオ

教室3カメラ

教室1カメラ

の順番となっている。

二番目が、いま申しあげましたコメントでございます。

被験者には、学生、院生、卒業生、全員含んでおりますが、評価の理由を聞いております。それをまとめておりますので、ちょっとご披露いたします。現場ドキュメント・アナの得点が高い理由は、系統的で内容がわかりやすい、言葉がはっきりしていて聞きやすい、音楽と画面がきれい、と申しております。私も聞いていて、音響効果が非常にあったような気がいたしました。それから、仏像のアップの迫力ということを感じました。

それから、教室1カメラの得点が低い理由というのは、単調、迫力がなくておもしろくない、時間がかかって講義内容が薄いという印象を持ったようでございます。脱線をするとう内容が散漫になり何をいっているかわからなくなるというようなことが出ておりました。

じゃあ全体的にどうしたらいいかということその人たちに聞いて、主なものをピックアップいたしますと、学生の問題提起があり、それに対する研究方法の紹介をしながらの講義を希望するとか、教室の講義では不可能なものをできるだ



けくわえてほしいとか、対談形式を入れるとか、内容を身近なテーマとか、明るくて若い教授の採用——人選がむずかしいと書いてありますが——スタジオで概要を説明し、現場で確かめるとよい、視聴者に問いかける場面が欲しい、参考になる本をテレビで紹介してほしい、スタジオ・プラス現場ドキュメント・アナで見てみたい、眠くなるのはよくない、字幕、音楽の迫力、資料などを工夫してほしい……こういったようなことが全体的に出ておりました。

ただ、はじめに申し上げましたように、われわれは放送大学の学生を本当に持った経験がないわけですし、学力の評価をしておりませんので、基本的にこういう資料がどれだけ役に立つかという問題がありますし、内容も必ずしも同じとはいえないような気がいたしますし、同じ1人が6形式を固定順にみておきますとあきがくる。又人数がそれぞれ10人という制限もありますし、試験の影響がわからないとか、視聴率がどれくらいかわからないというような幾つかの問題はあります。

しかし、こういうことは承知の上で、私たちは番組をこれからつくっていったり、改善するとき、ある種の示唆、これをいいとするか悪いとするかというのは別問題としまして、何らかの示唆はえられると思います。私どもが大学としての放送番組を考えるときに、これにもかかわらず教室がいいんだというふうに結論づけて、そちらへ持っていくようなストラテジーをとることもできますし、いろんなときに考える資料にはなり得るのではないかと思います。実験の結果を紹介させていただきました。

中原（放送教育開発センター） 続きまして、ごく簡単に、ただいまと全く同じ内容に關しまして、日本女子大で阿部先生がご担当になっていらっしゃいます「宗教学A」の学生を対象にいたしまして、2週間にわたりまして、半分ずつみてもらった結果についてご報告します。

したがって、1週間休んで2週目にだけ出てきたというような者もおりますし、若干人数が違いますが、それぞれの個々の項目では実数で出しております。6タイプ全部を視聴した学生は79名でございまして、第2週の3つのタイプ、ド

キュメントと中継だけを見たというのは4名でございます。

形式は、ここに第3、4表の形でとりまとめてあります得点と順位づけのほかに、自由記述で細かい意見を書いたレポートを出してもらいました。

ただ、順位づけの方は、2つだけが1位で、あとはもうだめだ、ゼロというものもございますし、1位と6位だけつけて、中間はもうどれでもよろしいというような書き方のもございます、きちんと1位から6位まで順位づけをしてあるのもございました。そのグラフの数字全部をトータルいたしますと、そういう点で若干の違いは出てまいります。

第3表 受講生による項目別採点表

(10点満点)

項目 タイプ	よ さ	わかり 易さ	おもしろさ	学 習 意 欲	迫 力	全平均
ス タ ジ オ (79人)	5.44	5.88	4.27	4.39	3.78	23.77
教室(1カメ) (80人)	3.84	4.39	3.78	3.83	3.17	18.98
教室(3カメ) (79人)	4.95	5.06	4.77	4.61	4.27	23.65
中 継 (82人)	5.98	5.61	5.95	5.04	5.52	28.09
ドキュメント (講師) (83人)	6.92	6.71	6.73	6.13	6.47	32.96
ドキュメント (ナレータ) (83人)	7.98	7.69	7.87	7.01	7.95	38.49

第3表は、10点満点で採点してもらったものを、集計したものでございます。

一番点数の高いものから申しまして、各項目が10点満点で、5項目の合計は50点満点になりますけれども、平均しますと22.77で、項目別には教室の1カメラが18.98、教室の3カメラが23.65、中継が28、ドキュメントが講師で32、久米明

さんで38であります。先ほどの坂元先生の調査とそう変わらない結果が出ております。

視聴した学生は、1学年の学生が主体で自然科学系も人文科学系も受講しております。

それから順位でございますが、まず大学講座としてどれがよいかというのでございますが、1位をつけたのがナレーターによるドキュメント、57名の者がこれが一番よろしい、とこたえています。

つぎは、ぐっと下がりました、講師によるドキュメントが11名でございます。教室の1カメラになりますと、これが一番いいという人は1人もいない。

6位になりますと、ナレーターによるドキュメントが一番悪いとした人は1名でございます、教室の1カメラは36名が一番大学講座としてはよくない、と答えてあります。

それから、スタジオでございますが、一番いいというところは3名で少なく、一番悪い、スタジオ形式というのは余りよくないというのは二番目に多いのでございます。

ただ、わかりやすさという点だけみますと、スタジオというのはこれが一番いいというのは三番目でございます、これが一番悪いというのは3名です。スタジオ形式というのは、わかりやすさにややすぐれ、すべての面において大体中間的な評価でそう受けとめられている。

ただし、ほかの項目についてはどうもスタジオというのは、余り歓迎されていない。これはやはり講師の先生のバスト・ショットが多過ぎるというのが、一番の原因ではないかと思うのです。

もう一つ、全員が裏表ぐらいに、大変よくレポートを書いてだしてくれております。ざっと読みまして、ごく簡単に、どのような意見があるかということをご紹介しておきます。

まずスタジオ型でございますが、内容が整い過ぎて、むだはないけれども、どうも退屈である。特にテキストに忠実過ぎるので、これならことさら両面を見る必要はない。テキストを読めばもうそれでいいのではないか、テレビでやるんな

ら、実物の映像をもっと入れるべきであるというのが非常に多いわけです。

それから、講師の顔出しが多くなって、どうもこれは退屈でしようがないというのは実験番組全部において、どの先生も、バスト・ショットが余りながくなると、どうも評判よろしくないようです。講義というのは話しているうちにだんだん熱が入って、若干脱線してもいい、そういう意味で学生が引き込まれていくような魅力が欲しいというのが大分ございます。スタジオでやるときには、どうもそれが出せないということでございます。

それから、いま申しましたように非常にきちんと整理されていて、おもしろいとか、学習意欲を起こさせるとか、引っ張る力というのはどうも少ないのだけれども、考えをまとめるのはスタジオ型というのはなかなかよろしいというのがあります。

結論としまして、大多数の人が、番組の前後にだけ講師が出て導入とまとめをすれば、後はできるだけ映像資料で説明をするというのが大学講座としてはいいんじゃないか、スタジオ型については大体こういう意見が主なところでございます。

それから教室の中継型でございますが、これは学生の反応がすぐわかるので一番いいと書いた人もございます。質問ができるし、先生とはだの触れ合いが感じられる、それは大変いい、と書いてあります。

ところが一方では、学生のリアクション、あるいは質問も普通の人が居間でそれを見たとき非常に疎外感を受ける、つまり、あの人たちは参加している、私たちは全員参加出来ない、自分たちだけのけ者であるという疎外感をうけるので、この方式はよくないのではないかというのがでております。

ただ一つ、ほとんど全員が書いておりますのは、全盛は教室に慣れているので、顔つきや話し方や動作、動きが非常に生き生きとしていて、ほかと比べるとはるかによろしいということでございます。

それから現場中継型でございますが、これは実物が見られてわかりやすいけれども、どうもおもしろさとか学習意欲というものは、教室とそれほど変わらない。スタジオ型よりは退屈しないからいいのだが、テキスト以外のことは詳しくわか

るけれども、ドキュメントと比べるとどうもぐっと落ちる、という意見が多い。さらに先生の動きが固定しておりまして、教室よりもさらに先生が堅くなってどうも迫力に欠ける。ただ、その場の雰囲気伝わってくるのは非常にいいけれども、話の焦点がぼけて漠然としている、という結果が出ております。総じて教室よりはリアルでいいけれども、授業としてはどうもつかみにくい、つまり、ある程度おもしろかったというだけで、学習としては余り効果的ではないのではないのか、それから、それから、理論面での説得力にどうも中継したのは欠けている、断片的で流がつかみにくい、ということであります。

まとめてみますと、大学の講義としては、何回かに一回ぐらいはこういうのが入った方がいいのではないかとということでございます。

それから、一番問題になっておりますドキュメント型でございます。これはいまグラフでご説明しましたように、一応評判は大変よろしいわけですが、まずわかりやすく、見ていて映像に引きつけられる、その結果、内容への関心が高まり、おのずから学習意欲がわいてくるということが大半でございますが、先ほど西田先生がご指摘になりましたように、迫力はあるが、大学の講義として考えるとどうであろうか、という問題はのこっております。

ただ、問題は、たくさんの方が書いているんですが、大学講座の感じがしないという聞き方をしているわけです。大学講座としてだめだとは書いてないんです。それはどうも、ただ感覚的に受け取って、日ごろ慣れた教室に先生が来られて、そこでチョークと黒板消しでいろいろ講義なさるといのがどうも大学の講義であるという、これは固定観念とっていいのかどうかわかりませんが、それに慣れている人からすると、どうも羽目を外しているような感じがするらしい。だから、大学講座の感じがしない、と。これは一人残らず、大学講座ではないとは書いてないんです。「感じがしない」という書き方をしております。先ほど今野さんがちょっとそれに触れたのに関連するかと思います。

もう一つ、これは何も柳川先生がどうこうじゃないのですけれども、先生が出てこないで非常に流れがある、したがって、やはり番組自体に引き込まれていく、目と耳で、ちゃんと理解できやすい。逆に、見る方は、じっとして動かない

のだ、だから、両面の方はやっぱり動いてくれないとどうもいかん、こういう意見は初めてなんですが、自分が固定している以上、相手の方は動いたものの方がいいという意見もあります。

ただ、ドキュメントで一番ぐあい悪いのは、六道とか、そういうむずかしいことは黒板を使って説明してもらわないとどうもわかりにくい。テキストにそれが出ていけばいいんじゃないかという意見もございます。

大体大まかなところはそういうものですが、私の方で考えてもなかったようなことをきちっと書いたのがおりまして、こういうことを書いております。『ビデオ学習においては、大学の教授という役割りは不必要になってしまうのではないかと思う、つまり放映までの下準備はもちろん教授による綿密な授業計画が必要と思うが、後はプロのアナウンサーがかわりをした方がはるかにいいのではないか。』

これらの意見をまとめますと、スタジオはよくわかるけれども、どうも眠くなってくる、教室中継はおもしろさはあるが、わかりやすさの面では若干劣っている、現場中継は少し散漫になる、特にいいというわけでもないし、特に悪いというわけでもない、ナレーターのドキュメントはわかりやすく学習意欲が一番わいてくる、ただ、ナレーターによるドキュメントはすべての面でほかよりいいが大学講義らしくないのが欠点ということでございます。

司会 一わたり、準備していただいたお話は終わったんですが、①、②、③、④と、討論の柱のようなものを挙げさせていただきました。

①が＜学問の位置と表現の形式＞です。これまでの学問を考えてみますと、学問の構造と表現の形式とか、学問の伝達の形式という問題がでております。先ほど来、話が出ておりますように、たとえば大学の講義“らしい”というのは何であるとか、“らしくない”というのは何であるかとい

うような問題、あるいは今野さんのご指摘のように、いわゆるアカデミズムというのがニューメディアというものはなじむものかどうか、なじむとすればどうなのかという問題であります。

その問題は必然的に恐らく②の＜大学教育番組制作の体制＞につながります。端的に言えば内容があつて形式がある、あるいは内容があつて方法あるものであります。そこで当然やはり内容と方法で、その間にあつれきなり摩擦なり、人と人との問題と